様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　５ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１３１２４

研究課題名（和文）在華プロテスタント宣教師の太平天国認識

研究課題名（英文）Protestant missionaries and Taiping Rebellion at Modern China

研究代表者
土肥　歩（DOI, Ayumu）

同志社大学・文学部・助教

研究者番号：１０７３１８７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：太平天国は、キリスト教（プロテスタント）の思想に着想を得た洪秀全が上帝会（拝上帝会）を結成し、中国内陸部で勢力を拡大し、1851年に反清朝の武装蜂起に至った。そして南京を占領したのち、1864年の南京陥落に至るまで中国を混乱に陥れた。本研究では、中国に滞在していたプロテスタント宣教師がこの時期に発生した反乱をどのように情報を分析していたか、もしくは、太平天国滅亡後にどのような認識を抱いていたかを分析することを主眼とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
プロテスタント宣教師が太平天国をいかに認識していたのかは、若干の先行研究が存在する。しかし、太平天国の勢力が変遷する中で、どのように認識を変化させていたのか、もしくは大変天国崩壊後に、その歴史的性格にどのような評価を下したのか、という観点では史料を用いた実証的な研究はそれほど多くない。それゆえ、本研究課題を通じて、これまで個別に存在していた中国近現代史と欧米のプロテスタント宣教師の視点を交錯させることができるのではないかと考えている。

研究成果の概要（英文）：In the first half of the 19th century, Hong Xiuquan, who was inspired by Protestant ideas, organized the God Worship Society. The member of its society increased in Guangxi Province, and rose in revolt against the Qing Dynasty at 1851. This society, lately called as Taiping army, occupied Nanjing in 1853, but collapsed in 1864 due to the resistance by the local gentries and the internal conflict within the Taiping leaders. The purpose of my research attempts to clarify an attitude of the Protestant missionaries in China toward the rebellion, and their historical recognition after the rebellion.

研究分野：中国史

キーワード：宣教師　プロテスタント　史料　太平天国

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1840 年代、キリスト教（プロテスタント）の思想に着想を得た洪秀全は上帝会（拝上帝会）を結成して広西省(現在の広西チワン族自治区)を中心とした内陸部で勢力を拡大した。そして、1851 年に反清朝の武装蜂起を実行し、1853 年には南京を占領して天京と改称した。しかし、地方における根強い抵抗や太平天国指導者たちの内部対立によってその勢力は衰退し、1864 年には南京（天京）が陥落した。中国に甚大な被害をもたらした太平天国の経緯は、各種参考文献や世界史の教科書に基づけば、このように整理されるだろう。

太平天国興亡の歴史や、洪秀全自身がどれほどプロテスタントの思想的影響を受けていたかについては、一定程度の研究が存在する。ただし、これまでの研究手法および研究で用いられてきた史料については再検討すべき二つの課題が残されている。一つは史料上の問題である。これまで、研究者の多くは太平天国の指導者とゆかりが深い宣教師が記録した欧文史料に依拠して研究を進めてきた。たとえば、宣教師セオドア・ハンバーグによる『洪秀全の幻想（原題：*The visions of Hung-Siu-tshuen*）』（青木富太郎訳、生活社、1941 年。原著 1854 年出版）は洪秀全の従弟である洪仁玕（こうじんかん）からの口述記録に基づき、彼の経歴や広西省における上帝会の活動をまとめている。この文献は太平天国の実像やその指導者の動向を知る上では有効といえるが、その記述は太平天国が南京を首都とした直後の 1854 年までにとどまっている。そのため、太平天国全体を見渡すという点では、さらなる資料の発掘が必要とされるだろう。

二つ目に宣教師への着眼点である。研究者の多くは、洪秀全にキリスト教の教義を教えたり、太平天国の支配地域を訪問したりするなど洪秀全たちと密接な関係にあった宣教師の言動に着目してきた。しかし、太平天国と距離を保ち、中国沿岸の開港場（条約港）に居住しながら太平天国の動静を報告していた宣教師が存在したという事実や、太平天国崩壊後にどのような歴史解釈が与えられてきたかについては、ほとんど光が当てられてこなかった。

以上二点の未解決の問題を総合すれば、「宣教師たちはどのように太平天国の興亡を評価していたのか」という本研究課題の「問い」に逢着する。

２．研究の目的

以上の課題を解決するため、同時代のプロテスタント宣教師が残した記録を通じて、宣教師による太平天国認識を解明することが本研究の目的となる。本研究の独自性は、中国に滞在していたプロテスタント宣教師の視点を借りて、太平天国に関する新たな歴史像を提示するだけでなく、これまで未解明だった宣教師の太平天国認識の変遷を明らかにすることにある。

３．研究の方法

本研究課題を遂行するため、当初報告者が想定していたのは、プロテスタントの伝道団体が発行していた定期刊行物の記事や、マイクロフィルムにおさめられた宣教師たちの書簡を中心に、宣教師の太平天国認識の変遷を描くという研究手法であった。

ただし、本研究課題を進める中で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行が想定以上に長期化したことも事実である。その影響や個人的な事情などにより、本研究課題が研究開始当初から国内外における史料調査の実施について制約を受けた事実は否めない。そのため当初予定していた研究手法や研究活動を年度ごとに微調整しつつ実施せざるを得なかった。

ただし、報告者自身は 20 世紀中国における太平天国にかんする歴史認識について研究を進めてきた経験を持つ。この研究で、太平天国の指導者である洪秀全が手にした小冊子『勧世良言』の執筆者である中国人信者梁発に着目した。梁発の死後、その業績が広東や香港のキリスト教聖職者の手によって 1910 年代から 1930 年代に発掘・発信されることで、キリスト教伝道の結果として太平天国が建国され、中国人信者たちが太平天国（＝革命）とキリスト教の関係を強調していったことを実証した（拙著『華南中国の近代とキリスト教』東京大学出版会、2017 年、第 5 章・第 6 章参照）。また、近年は 20 世紀初頭に広西省で発生した自然災害と外国人たちの救済活動について研究を進めていた（「広西省における壬寅奇災とアメリカ救済遠征隊」『東洋学報』第 102 巻第 1 号、2020 年 6 月）。

それゆえ、制約のある研究環境の下で本研究課題を長期的に推進していくための史料論を習得することや、過去に得られた知見を本研究課題に可能な限り活用してくことも視野に入れつつ研究を行った。

４．研究成果

上述の通り、研究計画に大幅な変更を加えざるを得なかったが、本研究課題を通じて、研究成果を発信することができた。

1 点目に、前述の「史料論」という言葉にもある通り、書評「曺貞恩『近代中国のプロテスタント医療伝道』」（『中国研究月報』第 76 巻第 8 号、2022 年 8 月）を執筆することにより 19 世紀

中葉以降の医療伝道研究における中国人と宣教師の関係性について理解を深めることができた。研究ノート「英語著作に見える孫文と宋慶齢の「結婚」：ポール・ラインバーガーを中心とした予備的考察」（『中国女性史研究』第 32 号、2023 年 3 月）では、1920 年代に英語で執筆された最初期の孫文の伝記を取り上げることで、中国におけるキリスト教伝道だけでなく、英語文献に関する史料批判の在り方について理解を深めることができた。

2 点目は上帝会（拝上帝会）による武装蜂起の策源地となった広西省（現在の広西チワン族自治区）についての研究である。そもそも、私はこの地域のプロテスタント伝道の状況について理解する必要があると考え、20 世紀初頭に発生していた自然災害で救済活動に従事した宣教師の史料を基礎として、広西省におけるプロテスタント・カトリック教会の伝道に関する歴史を研究することができた。文献史料を調べる過程で、太平天国の発展がこの地域におけるプロテスタント伝道の進展に否定的な影響を与えていたことを知る事ができた。この成果自体を文章化することはできなかったが、その成果の一部は「在華プロテスタント宣教師と災害救済：広西省を事例として」という論文にまとめて発信することができた。なお、2021 年 12 月に行われた日本華南学会で「民国初年の広東農村」（オンライン開催）、2022 年 8 月の明清夏合宿では「辛亥革命下の農村：広東省花県を事例として」（対面・オンライン併用開催）とそれぞれ題して学術報告を行った。これは 20 世紀初頭を視野に入れた研究報告であったものの、洪秀全が生まれ育った広東省花県の地域的性格を知るうえで大いに役立ったといえる。

3 点目はイギリスにおける史料調査である。過去数年の社会情勢ゆえに海外渡航が制限されていたが、本課題実施の最終年度に制限のない海外渡航が可能となった。そのため、2023 年 11 月末から 12 月初頭にかけて、イギリスの公文書館（the National Archives）を訪れ、広東省に関係する領事報告（F. O. 228/363 など）を閲覧した。この資料のなかで広東省に駐在していたイギリス領事が太平天国後にその歴史をどのように評価したかをうかがわせる史料があり、宣教師側の認識と照合するなど、今後の継続的な調査がまたれる。

4 点目は太平天国の歴史認識についての論文執筆である。同論文は、1912 年初頭に清朝の中国支配が終了した直後に、中国社会内部で太平天国に対する評価がどのように変化したのか、主要な中国語新聞を手掛かりに論じている。年度末に論文を学術誌に投稿した結果、2024 年度に査読意見を得ることができた。現在、これに基づいて論文の修正を行っている。

以上、本研究課題の遂行にあたって各種の制約があったものの、研究内容の一部を公表することができた。今後も本研究課題について引き続き取り組んでいきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 土肥歩
２．発表標題 辛亥革命下の農村：広東省花県を事例として
３．学会等名 2022年度明清史夏合宿（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 土肥歩
２．発表標題 民国初年の広東農村
３．学会等名 日本華南学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 土肥歩
２．発表標題 孫文と宋慶齢の「結婚」をめぐる同時代的言説
３．学会等名 中国女性史研究会・宋慶齢研究会共催ワークショップ
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関